町名の由来と今 第1回

昨年度は、「ぶらり街歩き」を4回に渡って掲載し、実際に街を歩くことで、地域の文化財や景観を知る楽しさをお伝えしましたが、今号から、「町名の由来と今」をシリーズで掲載します。私たちの住む地域の町名について、その由来や、歴史、そしてその地域の現在の様子を知ることで、地域により一層の親しみを持つことができるのではないでしょうか。郷土博物館分館学芸員の幸田有美子さんにご執筆いただきます。

地名の歴史と由来/荻窪編

幸田有美子（杉並区立郷土博物館分館）

はじめに

現在、杉並区内には36の町があります。例えば、荻窪地域区民センターの住所「杉並区荻窪二丁目34番20号」では「荻窪二丁目」が町名に当たります。これらの町名は「住居表示制度」により、昭和38年9月1日から整備が始まり、44年11月1日に完了しました。

このシリーズの初回では、まず杉並区内の町名の変遷を追いながら、皆さんに馴染み深い「荻窪」の町名の歴史と由来をご紹介します。

杉並区の町名

江戸時代中期の杉並区域内には、下図のように20の村がありました。これらの村は天領地と私領地など領主が異なっており、「上荻窪村」は天領地、「下荻窪村」は日枝山王社（千代田区）が領主でした。

明治維新以降は、明治22年の「町村施行」によって各村が合併し、「杉並村」「和田堀内村」「井荻村」「高井戸村」の4村が誕生します。かつての「上荻窪村」と「下荻窪村」は「上井草村」と「下井草村」と一緒になって「井荻村」になりました。

次の大きな変化は大正13年の「町制施行」です。これにより「杉並村」は「杉並町」となり、翌々年に残りの3村も町になりました。そして昭和7年には、杉並区域が属していた豊多摩郡は東京市と合併します。これに伴い4町も東京市に編入され、同年10月1日には4町が合併して「杉並区」が誕生

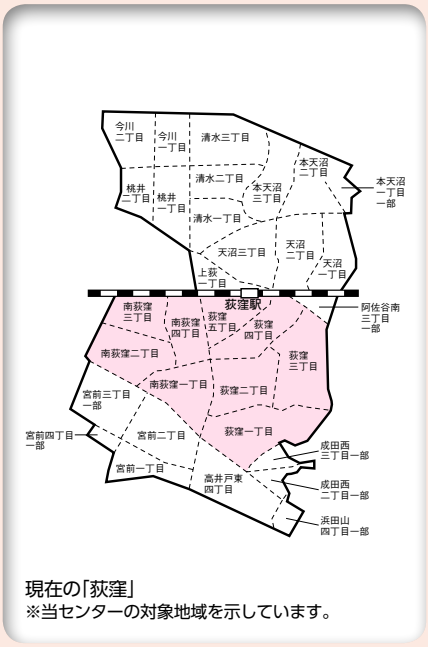
「荻窪」の由来

「荻窪」の名は江戸時代中期頃にあったことが分かります。皆さんもご承知のとおりこの辺りは、荻が多く自生していた低地だったという説が伝えられています。荻にちなんだ事柄としては、荻窪駅近くの光明院（上荻2丁目）の縁起（起源・由来）が挙げられます。光明院の縁起石碑には、和銅元年（708年）に高僧の行基が作った菩薩尊像を背負った行者が、荻の原に差しかかると急に尊像が重くなり歩けなくなったため、この地との縁を信じて野原の荻を集めて堂を建てたと記されています。かつて荻の群生は、この辺りの見慣れた風景の一つだったのでしょう。残念ながら、これ以上の由来は明らかになっていません。

荻はイネ科ススキ属の植物で、その形はススキによく似ています。成長すると2メートル程まで伸び、河川敷などの湿地帯に群生します。おそらく善福寺川沿いなどに群生する風景がこの地名の由来に結び付くのではないでしょうか。今ではほとんどその姿を見ることができなくなりましたが、郷土博物館本館（大宮一丁目）の古民家裏手や、天沼弁天池公園（天沼三丁目）の池付近で見ることができます。

杉並区立郷土博物館古民家裏手の荻（8月撮影）

出典：杉並区立郷土博物館常設展示図録（平成27年10月）



現在の「荻窪」
※当センターの対象地域を示しています。

※「この街にこの人あり」のコーナーは、しばらく休載いたします。